

教学之源流

第一回入学式告辞

昭和四十年四月二十一日

創立第一回の入学式に当り、私の所信の一端を述べて告辞と致します。

本学に志願された諸君も、また御子弟を本学に託せられた御父兄も、本学を撰ばれた所以のものは、学校要覽に要約しておきました本学の建学精神と教育方針に賛同されたからだと思います。私が本学の創立を決心致しましたのは決して昨今の事ではありません。既に過去五年以来、構想と計画を進めて来たのでありますが、それは決して今年から始まる高校卒業生急増のブームを予想した営利事業としての大学経営のためではありませんでした。現在の一触即発ともいふべき国際的危機と不安定極まりなき国内諸情勢に直面して、祖国日本の将来の運命を荷負つて立つ指導的若人を育成する最高教育機関としての総合大学を新しく創立するに非れば、わが国の前途は破滅の一路を辿るやも知れぬ、そういう私の憂国の至情が、幸いにして学界、財界、政界の多数の同憂の士各位の共鳴と絶大の御支援を得て今日、本学の実現を見るに至つたのであります。

そもそも大学教育の真髄は単なるデパート的知識の切売場ではありません。その根本は国家社会の指導的人材の人間形成であります。人間形成とは何であるか。まずこの点に関して本学の建学精神の要点を簡単に説明しましょう。世界人類の如何なる人間であれ、人間というものは二面の人間性をもっております。その一面は国民、日本であれば日本国民、としての社会人であること。他の一面は独自の人格を有する個人としての人間である事であります。従つて人間形成もまた、この両面から考えねばなりません。

日本国民としての人間形成の目標として本学の理想的人間像は、まず第一に日本国民であることの自覚に徹し、他に依存する事なく自主的に自力で祖国日本の独立と平和を衛る国防精神を各人が堅持し、更に日本民族の幸福と繁栄のために利己心を捨てて公共の為に献身する人間である事。一口に言えば真の愛国者である事であります。しかもこの愛国心は偏狭な愛国心であつてはなりません。それは現代の世界情勢に対する自主的分析判断能力をもち国際的見地に立つた愛国心でありまして、祖国日本に対する愛国心を通して世界全人類の平和と幸福に貢献するものなればなりません。

独自の人格を有する個人としての人間形成の理想的人間像は基本的人権の尊重と個人の自由の精神に徹し、あくまでも自主的判断に基づき、独自の自由意志に従つて行動する人間であります。ところでここで問題となるのは、しからば一体、基本的人権とは何か、自由とは何かという事で

あります。諸君！ 諸君はこの質問に対し正しく答え得る自信がありますか。私の見るところでは現在の中学や高校の教育を受けたもので基本的人権とは何ぞや、自由精神とは何ぞや、この事を真に正しく理解しているものは殆んどないと断言してはばかりませぬ。本学においては民主主義の根底をなすところの基本的人権と自由精神を徹底的に究明させる方針であります。何故ならこの二本の柱が個人人格としての人間形成の基盤であるからであります。

次に本学は産学協同を実践する総合大学の完成を最終目標と致しますが故に京都産業大学と名付けました。現在の世界の大勢は開放経済、自由貿易の時代でありまして、わが国も好むと好まざるに拘らず、この大潮流の中に捲き込まれております。戦後二十年、日本の経済界は西ドイツと並んで、世界の驚異と言われるまでに高度の成長を致しました。その理由はここでは省略致しますが、しかしながら真実を言えば、日本経済の底は極めて浅く、生産技術の基盤は極めて薄弱であります。それ故、今までの日本産業機構のままでは世界の先進国に立ち遅れ、近い将来に国際経済界の落伍者となる事は必条です。さすればこの際、国際経済場裡に指導的役割を果し得るところの科学的合理的産業経営者と、独創的科学家、発明的技術者の養成こそ大学教育の最大の急務であると私は信ずるのであります。今や大学は青白きインテリのたてこもる象牙の塔であつてはなりません。現実の産業界と密接な連繫を保ちつつ理論と実際との融合した教育に依つて、

卒業後直ちに実社会に役立つ実力を身につけ、日本将来の産業界を双肩に荷負つて立つ、そういう自信に満ちた人材の育成が本学の使命であります。世界万国が充分に認めておりますように、日本民族はその勤勉性において、その知能性において、世界で最も優秀な民族であります。さすれば、かかる人材の養成も大学教育のやり方次第で実現は寧ろ容易であると私は確信致します。諸君、ここで私は諸君に重大な決意を要請致します。私の教育方針は学習において訓練において極めて厳しい事を覚悟して、決して怠けない、理由なくして欠席、遅刻を絶対しない事、このような決意を固める事を諸君に要請致します。学業の成績が人間形成の第一の要素ではありませんから諸君の勤勉に対しては必ず酬いられるものがある筈です。

最後に大学の自治の問題について一言します。私は本大学の自治は断平として衛る決心であります。大学の自治とは経営者としての理事会、教育に関与する教職員、及び学生によつて構成される共同体自身による自治でありまして、右翼であれ、左翼であれ、その他如何なる種類の団体であれ、外部からの一切の干渉を絶対に拒否するものであります。この自治を擁護するものは法治国家日本の法律であります。それ故、大学の自治は治外法権という事ではありません。この点を諸君は肝に銘じて置いてもらいたい。不幸にして現在、日本の既成大学で真の大学の自治が衛られている大学は一つもありません。例えば国民の生命財産を守ってくれる警官を目の敵とし

て校内立入りを拒否するだけが大学の自治だと心得、全学連とか、反国家的政党や労働団体、その他のオルグに躍らされているような大学の自治ならば、それは自治でもなんでもないのであります。

以上のような信念に基づきまして私は本大学を運営して行く決心しておりますが、本学は創立せられたばかりでありまして、本学には伝統的学风は未だありません。白紙であります。理想的学风の伝統を創造するものが本学の大学自治体に外なりません。特に諸君は本学創立第一回の入学生であり、そしてまた第一回の卒業生となる人々であります。私は世の多くの老人のように「今どきの青年は」などとは申しません。日本の将来の運命は諸君の双肩に懸つており、しかも諸君がその任務を果し得る若人であると信頼致します。諸君！ 諸君は自らが本学の先覚者たる事の自信に徹し、日本最高の堅実な理想的総合大学を諸君自らの力で完成する意気込みで、たくましく、豪胆に、しかも礼儀正しく活躍されんことを切望して私の告辞を終ります。

開学式挨拶

昭和四十年十一月二十七日

本日ここに開学式を挙行するに当りまして各界多数の有力な来賓各位の御臨席を得ました事は私の生涯における最高の光栄で御座いまして衷心より厚く御礼申し上げます。本学を創設致しました経過に就ては後程常任理事より報告申上げる筈で御座いますから省略させて戴きまして、私は本学の建学精神、目的、教育方針といった事に関し、私の所信の一端を申述べまして、御挨拶に代えたいと存じます。

大学とは申す迄もなく夫々の国家最高の学府で御座います。次の世代に国家社会の指導的地位に立つ可き人材の養成機関であります。しからばこの目的を達成する為に大学は如何に在る可きか。この問題について私あれこれと考え、また諸学者の説も多少読んで見ましたが、私浅学にして西洋にはこれと言つのが見つかりません。そこでふと心に浮びましたのが、幼少の頃、訳

はわからず素読させられました、中国の古典『大学』で、この『大学』こそが、この質問に最も適切な解答を与えるものであると思ひあつたのであります。勿論この大学は今日の学校としての大学とは意味が異なりますけれども、この古典の『大学』をば人間形成において実践する場こそ、今日の大学に他ならぬ、私は斯様に信ずる者であります。『大学』は二千五百年の昔、孔子が王者の学、即ち王道を説かれた遺書だと伝えられておりますが、現代においてもその真理性に変わりはないと私は信するのであります。ただ現代は民主主義の時代で御座いますから、国家の主権は国王一人の独占ではなく、全国民も均しく所有するところであります。それゆゑ、国民の一人一人が拳つて孔子時代の国王の心構えになつて孔子の『大学』の精神を体得しました時に始めて理想的民主主義社会は実現するのではなからうか。斯様に私は考えるのであります。況んや国家社会の指導的地位に立つ人々においてをやであります。さて『大学』章句の劈頭にはまず「大学之道八明德ヲ明カニスルニ在リ。云々」と書いてありますが、これが大学之道、即ち今日の大学の在り方の根本義だと思ひます。そして孔子は次の様に説きました。

「古ノ明德ヲ天下ニ明カニセント欲スル者ハ
先ツ其國ヲ治ム。其國ヲ治メント欲スル者ハ
先ツ其家ヲ斉フ。其家ヲ斉ヘント欲スル者ハ

先ツ其身ヲ脩ム。其身ヲ脩メント欲スル者ハ
先ツ其心ヲ正ス。其心ヲ正ント欲スル者ハ
先ツ其意ヲ誠ニス。其意ヲ誠ニセント欲スル者ハ
先ツ其知ヲ致ス。知ヲ致スハ物ヲ格スニ在リ。」

それから続いて同じ事を逆の順序で繰返し、

「物格リテ而シテ后ニ知至ル。
知至リテ而シテ后ニ意誠ナリ。
意誠ニシテ而シテ后ニ心正シ。
心正シクシテ而シテ后ニ身脩マル。
身脩ツテ而シテ后ニ家斉フ。
家斉ツテ而シテ后ニ國治マル。
國治ツテ而シテ后ニ天下平ナリ。」

と。

私はこの孔子の教えの精神を建学の精神とし、この精神に則つて本学学生の間形成に当りたい、これが不肖私の念願で御座います。そこで学識高邁なる来賓各位、教授諸先生を前にして浅

学(がく)非(ひ)才(さい)の私(わたし)が講(こう)釈(しゃく)めいた事(こと)を申(まを)述(じゆつ)べます事(こと)は洵(いひ)に僭(せん)越(えつ)、全(ぜん)く汗(あせ)顔(がん)の至(いた)りでは御(ご)座(ざ)います(が)、孔(こう)子(し)の言(ごん)語(ご)を私(わたし)なりに現(げん)代(だい)的に解(かい)釈(しゃく)致(ぢ)しまして、私(わたし)の意(い)の在(あ)る所(ところ)を御(ご)説(せつ)明(めい)申(まを)上(あ)度(た)存(ぞん)じますので、御(ご)退(たい)屈(くつ)とは思(おぼ)います(が)、暫(しばらく)の間(かん)、御(ご)静(じやう)聴(てい)のほ(ほ)ど御(ご)願(ねん)申(まを)上(あ)げます。最(さい)後(ご)の文(ぶん)句(こう)の「天(てん)下(か)平(へい)ナリ」とは「全(ぜん)世(せ)界(かい)の平(へい)和(わ)」の事(こと)であり(ま)す。最(さい)初(はつ)の文(ぶん)句(こう)の「明(めい)徳(とく)ヲ天(てん)下(か)ニ明(めい)力(りき)ニセシムル者(もの)」は「真(ま)の世(せ)界(かい)平(へい)和(わ)の現(げん)実(じつ)を欲(ほ)し、その為(ため)に献(けん)身(しん)努(ど)力(りき)する者(もの)」という意(い)味(み)に取(と)る可(べ)きであり(ま)し(よ)う。し(かし)な(が)ら、孔(こう)子(し)は続(つ)けて「世(せ)界(かい)の平(へい)和(わ)を現(げん)実(じつ)せんと欲(ほ)する者(もの)はま(ま)ずその国(こく)を治(ち)めよ」と説(せつ)破(ぱ)しました。治(ち)国(こく) 国(こく)を治(ち)めるとい(い)う事(こと)は現(げん)代(だい)語(ご)に翻(へん)訳(やく)致(ぢ)しますれば、平(へい)和(わ)繁(はん)栄(えい)の国(こく)家(け)を造(ぞう)り上(あ)げるとい(い)う事(こと)であり(ま)す(が)、し(か)らばその国(こく)造(ぞう)り(を)誰(たれ)がや(や)るか(か)と申(まを)しますと、こ(こ)れは、民(みん)主(しゆ)義(ぎ)の現(げん)代(だい)社(しゃ)会(かい)にお(お)きま(し)ては、国(こく)王(わう)の独(とく)裁(さい)でや(や)るの(の)で(で)な(な)く(て)国(こく)民(みん)自(じ)身(しん)が、国(こく)民(みん)自(じ)身(しん)の為(ため)に、国(こく)民(みん)自(じ)身(しん)の努(ど)力(りき)に依(よ)つて成(な)じ遂(と)げね(な)ら(な)い(ので)あり(ま)す。地(ち)球(きゆう)上(じやう)の全(ぜん)人(にん)類(るい)の中(なか)で、一(ひと)人(ひと)として国(こく)籍(せき)を(も)た(な)い(者)は無(な)い(筈)です。さ(さ)す(れ)ば我(われ)々(々)日(にっ)本(ぽん)人(にん)と(し)て申(まを)し(ま)す(れ)ば、心(こゝろ)から祖(そ)国(こく)日(にっ)本(ぽん)を熱(ねつ)愛(あい)し、自(じ)ら(の)力(りき)に依(よ)つて、即(すなは)ち民(みん)主(しゆ)義(ぎ)の原(げん)則(そく)に從(したが)つて、平(へい)和(わ)な繁(はん)栄(えい)した幸(さい)福(ふく)な日(にっ)本(ぽん)国(こく)家(け)を建(た)設(せつ)する、と(い)う熱(ねつ)意(い)を(も)た(な)い(様)な日(にっ)本(ぽん)人(にん)である(なら)ば、世(せ)界(かい)の平(へい)和(わ)と(か)、全(ぜん)人(にん)類(るい)の幸(さい)福(ふく)と(か)、そ(う)言(い)つた(事)を口(くち)にする資(し)格(かく)は無(な)いと私(わたし)は断(た)言(げん)しては(ば)か(り)ま(せ)ん。ま(ま)たそ(う)い(う)不(ふ)心(しん)得(とく)な日(にっ)本(ぽん)人(にん)である(なら)ば世(せ)界(かい)平(へい)和(わ)、全(ぜん)人(にん)類(るい)の幸(さい)福(ふく)に貢(こう)献(けん)する能(よ)力(りき)な(ど)、有(あ)る筈(はず)は(な)い(だ)らう(と)私(わたし)は思(おも)つ(て)であり(ま)す。

それゆえ、私(わたし)は世(せ)界(かい)の平(へい)和(わ)、人(にん)類(るい)の幸(さい)福(ふく)な生(せい)活(かつ)、世(せ)界(かい)文(ぶん)化(か)な(ど)、何(なに)ら(か)の点(てん)で役(やく)立(た)ち得(とく)る様(よう)な、対(たい)外(がい)的(てき)にも指(さ)導(どう)能(よ)力(りき)を(も)ち、し(か)も独(とく)善(ぜん)偏(へん)狭(きや)な愛(あい)国(こく)心(しん)で(な)く(て)、国(こく)際(さい)的(てき)視(し)野(や)に立(た)つ愛(あい)国(こく)心(しん)の旺(わう)盛(せい)な指(さ)導(どう)者(しや)と(し)ての真(ま)の日(にっ)本(ぽん)人(にん)を育(そだ)成(せい)する事(こと)を以(もつ)て、本(ほん)学(がく)教(きやう)育(いく)の基(き)盤(ばん)方(かた)針(しん)と考(か)え(て)い(る)の(ので)御(ご)座(ざ)い(ま)す。と(こ)ろ(で)、こ(の)様(よう)な真(ま)の日(にっ)本(ぽん)人(にん)と(な)る(為)に(は)、ま(ま)ずその身(み)を脩(しゆ)め(る)事(こと)、即(すなは)ち脩(しゆ)身(しん)が必(ひ)要(よう)であり、脩(しゆ)身(しん)の為(ため)に(は)心(こゝろ)を正(ただ)さ(ね)ば(な)ら(ず)、心(こゝろ)を正(ただ)す(為)に(は)その意(い)を誠(まこと)に(する)事(こと)を要(よ)し、窮(きゆう)極(ごく)にお(い)ては物(もの)を格(かく)して知(ち)を致(ぢ)す、即(すなは)ち格(かく)物(ぶつ)致(ち)知(ち)が基(き)礎(そ)と(な)る(ので)あり(ま)す(が)、格(かく)物(ぶつ)致(ち)知(ち)とは取(と)りも直(なお)さ(ず)、天(てん)地(ち)人(にん)万(まん)有(ゆう)、即(すなは)ち人(にん)文(ぶん)・社(しゃ)会(かい)・自(じ)然(ぜん)全(ぜん)般(ぱん)に互(たが)ひ真(ま)理(り)を探(たん)究(きゆう)して正(ただ)しい知(ち)識(しき)を身(み)に着(ち)ける事(こと)に外(ほか)なり(ま)せ(ぬ)。大(だい)学(がく)は正(ただ)にか(く)の如(ごと)き格(かく)物(ぶつ)致(ち)知(ち)の修(しゆ)練(れん)道(どう)場(ば)であ(ら)ね(ば)なり(ま)せ(ぬ)。現(げん)代(だい)にお(き)ま(し)ては、格(かく)物(ぶつ)致(ち)知(ち)は非(ひ)常(じょう)に広(ひろ)範(はん)圍(い)に互(たが)つて(お)り(ま)す。特(とく)に近(きん)世(せい)にな(つ)て急(いそ)速(そく)に発(はつ)展(てん)して参(ま)り(ま)した社(しゃ)会(かい)学(がく)、自(じ)然(ぜん)科(か)学(がく)と、その社(しゃ)会(かい)的(てき)的(てき)、技(ぎ)術(じゆつ)的(てき)応(おう)用(よう)と(の)研(けん)究(きゆう)は、国(こく)家(け)の繁(はん)栄(えい)と世(せ)界(かい)人(にん)類(るい)の生(せい)活(かつ)上(じやう)の原(げん)動(どう)力(りき)であり(ま)して、こ(の)方(かた)面(めん)の正(ただ)しい専(せん)門(もん)知(ち)識(しき)の習(しゆ)得(とく)と、そ(れ)ら学(がく)術(じゆつ)を進(しん)歩(ぽ)発(はつ)展(てん)せしめ(る)と(こ)ろ(の)研(けん)究(きゆう)能(よ)力(りき)の涵(くわん)養(やう)と(は)、本(ほん)学(がく)の教(きやう)育(いく)にお(い)て最(さい)重(じゆう)点(てん)を置(お)く(と)こ(ろ)で御(ご)座(ざ)い(ま)す。

し(か)しな(が)ら、大(だい)学(がく)にお(い)て習(しゆ)得(とく)した学(がく)術(じゆつ)知(ち)能(よ)力(りき)を現(げん)実(じつ)社(しゃ)会(かい)に実(じつ)践(けん)する者(もの)は、個(こ)々(々)の自(じ)身(しん)に他(ほか)ならぬ事(こと)に思(おも)い及(およ)び(ま)す時(とき)、実(じつ)践(けん)者(しや)の意(い)誠(まこと)な(ら)ず、心(こゝろ)正(ただ)し(か)ら(ず)、その身(み)脩(しゆ)ま(ら)ずしては、祖(そ)国(こく)の安(あん)泰(たい)も世(せ)界(かい)の平(へい)和(わ)も絶(たつ)對(たい)に現(げん)実(じつ)する事(こと)はあり(ま)す(ま)い。それゆえ、本(ほん)学(がく)にお(き)ま(し)ては、現(げん)

代諸科学の進歩最前線の知識教育に万全の努力を尽しますと同時に、古今東西の倫理的精神教養を豊かに身に着け、特に日本古来の美しい道義的伝統をバックボーンとする人間像を理想として、その人間形成の爲め、最善の教育・補導を行い度い、と念願しております。

次に大学の使命は単に学生を教育するだけではありません。同時に大学は最高の学術研究機関であり、少壮有爲の学者・研究者・技術者の指導育成機関でもあらねばなりません。人文・社会・自然の別を問はず、学術全般に亘つて真理を探究し、創意的工夫研究に依て未知の事実・法則を発見し、新機軸の方法・技術を発明し、以て人類の文化を躍進せしめることこの源泉こそ、大学に他ならないのであります。この大きな使命を忘れた大学は、大学たるの資格は無い、と私は敢て断言してはばかりません。この点を深く反省致しまして、本学では設立に際しましても内外、特に欧米出版の各種専門図書、学術雑誌、その他の研究資料を出来得る限り取揃えしましたし、今後も蒐集する努力を続けるつもりであります。また高性能の精密実験機械、観測器械を取揃える用意が御座います。そしてそれらの使用または運転に必要な研究施設・実験室等を完備し、以て本学に在職せられる若い教員諸君の研究遂行に万支障なき事を期しておりますので御座います。他方、研究指導教授としては各専門分野における最高級の権威をお招き致しまして、この理想を実現したいと全力を注いでいる次第で御座います。かくして本学に少壮有爲の学者が多数に揃い

ますならば、それが取りも直さず学生の教育補導、セミナー研究等を徹底せしめる所以ともなるのであります。また、本学は最高の学術研究機関たる事を目指しておりますけれども、いわゆる象牙の塔となる事を極力拒け、実社会の中に在る大学、実社会と直結する大学でなければならぬと意図致しております。特に産業界と協力連繫して教育と研究を行うところの名実相伴つ眞の産学協同の実を挙げん事を期しておりますが、研究施設を完備し、各専門分野の少壮有爲な研究員を揃える事は、産学協同の重要な一面でありますところの協同研究や委託調査、委託研究に対する強力な受容れ態勢となるものと信じます。

最後に、本学は経済学部経済学科と、数学科及び物理学科より成る理学部とを以て発足致しましたが、本学では今後七年間の年次計画をたてておりまして、産業経営、生産工業、技術革命に必要な、関連諸学部の増設、各学部における必要学科の増設、更に大学院の新設と、目下建造中の電子計算機センターを始めとして附属諸研究所の設置を実現して名実共に理想的総合大学を完すべく、余生幾許も無い老骨に鞭打ち、斃而後已の決意を以て奮励努力している次第で御座います。私のこの理想は全社会各界からの物心両面の御協力・御支援無くしては到底実現出来る事では御座いません。新しく誕生致しました本学の理想的完成の爲に今後共絶大の御協力・御支援を賜らん事をお願致しまして私の御挨拶を終らせて戴きます。御静聴ありがとうございます。

第二回入学式告辞

昭和四十一年四月十五日

諸君は約二倍の志願者の中から撰ばれて入学せられた。まず以ておめでとう。本日ここに入学式を挙行するに当り、諸君が是非共心得て貰い度い事に就て一言して置きます。本学を志願された諸君も、また御子弟を本学に託せられた親御の方々も、特に本学を撰ばれた所以のものは、大要覽に書いてあります本学の趣旨に賛同せられたからであつて、単に何処でもよい、大学に入学出来さえすればよい、と言つた御考えではないと言つ事を私は信じますので、今ここで改めて本学の建学精神や教育方針に就て申述べる事は省略致します。

説明する迄もなく、大学は最高学府であります。国家・社会の次代の指導者として祖国の運命を背負つて立つ可き青年の人間形成の場であります。小・中学校の如き義務教育機関ではない、大学に進学する青年は法的に義務づけられたり、他人の意志に強制せられたりしたのではなく

自分自身の自主的決意によつて、どうしても最高学府で最高の教育を受けたいと言つ熱意に燃えた青年である筈です。従つて入学後に勉強する勉強しないも全く本人の自由意志でありまして、決してそれを強制する事は出来ませぬ。しかしながら他の大学はいざ知らず、本学においては勉強するかしないかの自由を諸君の権利として充分に認めると同様に、卒業させるか落第させるかは本学の権限でありまして、本日の入学式において宣誓した上は、学則を守らないとか、本学の名譽を毀損する様な行為があつた場合には、容赦なく退学を命ずる事もある、と言つ事を覚悟して置いて貰い度い。規定の学科単位を修得出来なければ留年せねばなりません。但しそれは授業をサポートして勉強しない場合の事であつて、毎日出席し真面目に学習する学生であれば、必ず全課程を修得出来るよう、教育・研究の施設を拡充し、教員組織及び補導・厚生職員も充分に揃えて、必ず卒業出来るよう教育補導に万遺漏なき事を期しております。それが諸君を受け容れた以上、本学の義務だと考えているからであります。

大学は知識のデパートであつてはなりません。教師と学生とが精神的に協感して共に人格の向上を目指す人間形成の道場であり、同時に真理探求の協同研究体であらねばなりません。教師の人格が学術研究を通して学生の精神に反映し、それに依て人間形成も出来、また学生の研究能力の開発も出来るのでありますが、同時に学生を研究指導しつつある間に、教師自らが新しい研究

テーマを思い付いたり、新しい研究方法や新しいアイデアのヒントを得たとか、また学生が大学在学中に思わぬ画期的発見・発明をした事実は欧米にはその例が少なくないのであります。

真に学者であるところの大学教授の念願は、実社会では自分よりも偉い人間、学界では自分よりも優れた学者を育成する事です。実際、古来の偉大なる学者であった大学教授は殆んど総てがそうでありました。

かく考え来れば、大学の教師は単に教壇から講義するだけで責任が済むわけではない。常時、学生と接触して補導する義務があるのです。所定の時間に担当の講義をやり、講義が済んだら直ちに帰って仕舞う様な教師であるならば、それは講釈師や落語家と何ら変わる所はありません。本学ではその様な専任教員は一人も採用していません。授業の有る無しに拘らず、毎週少なくとも規定の日数だけは一日の勤務時間のあいだ研究室にあり、学生の質問に答え、学習・研究の指導に当るのみならず、その他何事であれ相談相手となる事が義務づけられておりますので、諸君は何ら遠慮気兼ねする事は要らない。この先生と思つ先生のところに押し掛けて行つて、学術上の質問は固より、身の上相談するもよし、先生の体験談を聴くもよからう。特に老大家の教授先生から色々御意見なり独自の人生観を拝聴する事に依て諸君の人格は自然と高い水準に迄引揚げられるであらうと信じます。

さて諸君は本日入学したばかりである。それゆえ、今後二年間は教養部の学生である。教養部における必要な学科単位を習得しなければ専門課程に進む事は許しません。留年させます。しかし私は人間形成を本学教育の第一義としておりますが故に、奮勉強をして試験の点数だけを取ればよいと言つのではない。

ラテン語の諺に MENS SANA IN CORPORE SANO と言つのがありますが、メンス・サナーとは健全な精神、イン・コルポレ・サナーとは健全な身体の中に、と言つ事で、諺は「健全な身体に宿る健全な精神」と言う意味であります。如何に秀才と謳われても人間形成では劣等生で、実社会に出て、知識だけで大物となつた例は無いのであります。本学でスポーツを奨励しているのはその為です。しかしそれはあく迄も人間形成の手段としてのスポーツでありまして、プロ選手養成の目的ではありません。世界最高の名門校英国のケンブリッジ大学やオックスフォード大学の伝統であり、English gentleman のバックボーンをなす所の sportsmanship を日本精神化したものが本学のスポーツ精神であります。この精神を忘れず、諸君がスポーツに依て健全な身体を作る事を希望します。

けれども、身体だけ発達して精神が空っぽでは、MENS SANA IN CORPORE SANO にはならず、日本固有の言葉を借りれば文武両道であらねばなりません。身心共に健全な人間形成の基礎として

て教養課程には人文科学系、社会科学系、自然科学系の諸学科が設けてありますから、諸君は教養部の二年間に、時間の許す限り多くの科目を聴講する事を奨める。聴いた事を覚えて置けと言うだけでもなければ試験の点数を問題にする必要もない。勤勉に出席して権威ある先生方の醫咳に接するだけで、その影響が諸君の心理の奥底に刻み込まれ、聞いた知識の内容は忘れて仕舞つても、これが潜在意識となつて広い多角的な観察力、理解力、推理力、判断力として働き、専門課程に進んでからの研究に大きな助けとなるのみならず、諸君が将来、実社会に出て仕事をする場合にも、創意、工夫、企画、決意、実行の原動力として現われるのであります。これが大学に教養部の置かれた所以です。

以上、私の言つた事を肝に銘じて、諸君は今後卒業まで、各自の人間形成に努力する事を決意してください。

本学は昨年四月に開学したばかりの新設大学ではありませんが、決していわゆる駅弁大学ではありません。諸君が卒業する頃までには、その規模において、その研究設備において、その教員組織において、全国私立大学中トップクラスの理想的総合大学となるでしょう。否、私は確平たる信念を以て、必ずこの理想を実現させて見せましょう。諸君の中には高等学校で余り成績の良くなかつた人もいる。その事は私が一番よく知っておりますけれども、それだからと言ってコンプレックスを感じる事はない。必ず諸君をば、どこの大学の卒業生にも負けない立派な人間として世の中に送り出す決意でありますから、諸君は京都産業大学の学生であることをプライドとして京都産業大学学生にふさわしい身だしなみ、態度、行動で堂々と京都諸大学の学生の間を闊歩して下さい。諸君の学生服の襟につけたバッジは希望の星座で、大宇宙空間を隈なく自由奔放に翔け廻るギリシャ神サギタリウスの表徴です。諸君はこのバッジにふさわしい大きな夢を抱き、日本古来の道統をバックボーンとする気宇宏大な国際的人物となつて、日本国家の独立安全と日本民族の繁栄に献身すると同時に、全世界の平和と全人類の幸福の為に寄与すべく、在学中、健全な身体と健全な精神を作り上げ、堅実な思想と、深遠な専門知識と、豪快な実行力と広汎にして高い水準の教養を体得する事に専心努力せられん事を切望して、私の告辞を終わります。

第三回入学式告辞

昭和四十二年四月十四、十五日

本日ここに理・法・外国語三学部
経済・経営両学部の新人学生諸君を本学に迎えます事は私の洵まことに欣快きんがいとする所であります。諸君！入学おめでとつ。同時に御子弟を本学に入学させられました御父兄の方々の御喜びごよろこびもさぞかしであるつと、これまた衷心こころよりお祝申上げます。

ところで毎年の入学式で繰り返す事ではありますが、一言、諸君に御断りして置かねばならぬ事があります。私は本日唯今、諸君に入学を正式に許可致しました。しかしながらこれで安心して貰もらつては困る。何故なぜなら、この入学許可に依よつて、所定年限の間、乃至は在学年限迄まで在学しさえすれば無条件で卒業させるとは私は決して約束しないからであります。しからは一体どうすれば卒業出来るか？これは言ってみれば大きなクイズの様ようなものですから、一つだけヒントを与えて置きましょう。最高学府、即ち大学に学ぶという志を立てた諸君にとっては本日こそが諸君の

生の出発点であります。諸君の中には高校時代に成績優秀でエリート意識を持っていた人もあるでしょう。また比較的成績劣等で、自分は頭が悪いと言つ劣等感を抱いだいている者もあるでしょう。しかしながら、私はこの両者を少しも区別する事なく同等の人格者として取扱しよつ所存しよぞんであります。何となれば高校時代の成績の優劣の如きは大学教育では何等本質的な意味は無いからであります。私は約半世紀の長きに亙わたつて大学生の教育に従事して来た者でありますが、中学、高校時代の秀才とか劣等生などと言つ事は全然問題ではない、大学では大学生になつてからの勉学の意欲の強弱だけが人生の勝敗を決するのだという事実を、私の長い経験から確証たしなし得たのです。それゆえ諸君は、高校時代の優劣などは、一切忘れ、つまり一切を水に流して白紙に返つたつもりで、この入学式を以て諸君の学究生活の第一歩を踏み出すのだと固く決心して下さい。本学では諸君を真の人間形成の初歩から錬え上げる厳しい教育を施す方針でありまして、大学当局としてもその為に出来る限りの手段を尽す所存であります。諸君は最早子供ではないから、諸君が自主的に本学の教育方針について来なければ落伍らくぶする外ほかはないでしょう。落伍らくぶしない為に諸君が守るべき事に就ては来週、教務課のガイダンスで詳しい説明がある筈はずですから、ここでは省略しまして、今日は諸君にとつて最も嬉しい時でしょうから、御祝の言葉代りに、天下国家・内外情勢と云つたような宏大な見地から少しばかり話をしておきましょう。題目は何としましょうか。内容

には少々そぐわないかも知れませんが、諸君の良く知っている“Boys be ambitious”とでも置いて置きましょうかね。

米国の国際事情評論家として欧米で有名なカーンと言う人が極く最近『紀元二〇〇〇年＝三十二年後の世界』と言う本を著しました。近く日本でも翻訳が時事通信社から出版されるそうですが、今から三十三年後と言えば、丁度今世紀が終って二十一世紀の始まる年に当ります。カーン博士はあらゆる方面から集めた膨大な調査資料を綿密周到、科学的に分析総合した結論として次の様な予言をしております。第一に二十一世紀の世界は太平洋時代である。第二にその太平洋時代に全世界で最も産業経済力の強大な、文化及び生活水準が高く、そして国民所得最高の国家は米国とならんで日本であり、この両国が太平洋時代の全世界の指導国となるであろうと言うのであります。その他の結論は省略しますが、この様な事を吾々日本人が言うのであれば、恐らくお前は誇大妄想狂ではないかと笑われる位が関の山でしょう。けれども何分にもあちら様の御宣託でありますから、吾々は日本人の美德であるところの謙虚な気持でカーン博士の予言をそのまま信じ奉る事に致しましょう。そして信じたからには、吾々日本民族は自らの献身努力に依てあちら様の御期待に添う様な立派な日本国家を造り上げる根性を堅めねばなりません。それは兎に角私の意見では地球上で太平洋時代は既に始まっていると思います。しかもこの太平洋時代を出現

させる契機は何であつたかと言えば、ここに集まっている総ての青年諸君からすれば最早や現代ではない昔の事で、歴史の教科書の中だけで教わつた有史以来空前絶後というべき全人類の大事件、即ち第二次世界大戦の結果出現したアジア諸民族の植民地からの解放独立であります。日本ではこの大戦争の事を当時、大東亜戦争と呼びました。そしてその目的はアジア民族の解放と大東亜共栄圏の確立でありました。米国では太平洋戦争と呼称しその目的は当時隆々たる勢で興隆し世界列強から恐れられたわが日本を叩きつぶす事にありました。ところが戦後二十年経つた今になってジョンソン大統領もやつと気がついたと見えまして、日本が戦時中に言つたのと全く同じ意味の自由アジア諸民族の平和共栄を謳っております。何故なら世界全人類の三分の二以上の人口を占めるアジアの平和確立なくしては全世界の平和も有り得ないからであります。日米それぞれ見解の相違から大東亜戦争と言い太平洋戦争と言つたのでありますが、唯今私が言つたことを良く考えて見れば判るように敵味方につけた戦争の名称を両方併せると、洵によくカーン博士のいわゆる来るべき「太平洋時代の黎明」に、いみじくも相応わしい名称ではなかつたらうかと、私は今更ながら感慨無量であります。

「戦後」と言つ言葉は現在では最早や歴史の教科書のみで使用すべき言葉となりました。現代はまさしく太平洋時代の黎明期です。そして太平洋時代の国際社会で指導的役割を果す可き最も

強力な国家の一つはわが日本です。日本は今や敗戦国ではありません。堂々たる世界一流の大先進国です。そして日本民族が世界屈指の優秀民族である事を疑うものは世界中どこにもいないのです。諸君は決していわゆるアブレ・ゲールの青年ではありません。太平洋時代の先駆的青年です。諸君はこの美しい日本の国土の上に、極めて優秀な日本民族の血を享けて生れたのです。それが諸君の運命なのです。この運命に諸君は感謝し、この運命を無上の誇りとし、全世界を睥睨する程の気魄を養って貰いたい、それが私の諸君に対する希望の一つであります。

さて来るべき太平洋時代にカーン博士の予言通りの日本国家を造り上げるのは一体誰でしょうか、それは外ならぬ諸君の世代の青年の中から出る筈です。それはいわば若き日本国民を代表する世界的選手です。その選手はあくまでも真の日本人であらねばなりません。即ち、日本国民である事の民族意識に徹し、祖国日本を熱愛し、祖国の独立と安全を自らの力で衛り、日本民族の平和と繁栄を推進しつつわが日本を世界第一流の国家に造り上げる為に献身努力する、そして同時に日本国家の代表選手として太平洋時代の世界全人類の平和と幸福の為に働く能力を備えた国際的日本人であらねばなりません。この様な国際的日本人にまで諸君は成長して欲しい。これがまた、私の諸君に対する希望であります。この様な国際的日本人を理想的人間像とする人間形成こそが私の理想でありまして、この理想の実現を念願して私はこの京都産業大学を創立しました。

従つて本学は徹頭徹尾、日本古来の道義的伝統をバックボーンとする純日本的であると同時に内外全人類の自由と共存共栄を基調とする国際的な総合大学であります。

本学は開学以来僅かに満二箇年にしかありません。それにも拘らず既に国内よりも寧ろ海外において、より注目せられ、より高く評価せられ、より厚意的に期待せられつつある現状であります。この事實は諸君各自がこれからの在学中に如実に認識するであろう事を今ここで私は断言してはばかりませぬ。それゆえ諸君は本学に入学した事を無上の誇りとし、本学の学生である事の一目瞭然たる服装をし、礼節正しい紳士の拳動振舞で、全日本の学生の間を堂々闊歩して下さい。

最後に本日この入学式に集まられた諸君は諸君と同年輩の全日本の青年の中の極めて少数に限られております。諸君はそついつ恵まれた身分の人達です。諸君がそついつ撰ばれた身である事の出来るのは諸君のお父様やお母様、或いは御兄様や御姉様、その他保護者の方々が、諸君の為に非常に大きな精神的、経済的苦勞、負担をしておられるからであります。この事を寸時も忘れる事なく、諸君自身の道徳的、知能的、身体的人格形成の為自ら克苦勉励する事を怠らない様々も切望して私の告辞を終わります。

第一回卒業式祝辞

昭和四十四年三月二十日

本日ここに本学第一回の卒業式を挙行するに当り一言御祝の挨拶を申します。諸君！卒業おめでとう。

ところで、大学の卒業式と言えば全国どの大学においても、学長は卒業生に対して何か教訓めいた事を一言述べるのが慣習となつてきている様ですが、私はその様な事は全くナンセンスだと思ひます。何故なら諸君は入学以来四年間の学生生活で、諸君各自の今後の全人生を律する精神原理とても申しますか、いわゆる Lebensphilosophie 即ち処世哲学を夫々何らかの形で自主的に体得し、従つて独自の個性を確立せられている筈だからです。

さて私は今この壇上に立って唯々感慨無量であります。諸君が本学創設の第一期生として入学した当時、まだ造成・建築中だったキャンパスと学舎、施設等々の貧弱な状態がまざまざと目に浮んで来るのであります。諸君とても恐らく同感でありましょつ。

私はその時の入学式において私がこの大学を如何なる意図のもとに、如何なる目的の為に創立したか、その建学精神は如何、と言つた事を述べ、そしてこの建学精神のもとに、諸君と共に本学独特の伝統を築き上げようではないか、と諸君に呼びかけました。また、建学精神に就ては同年末の開学式においても再度強調しておきました。そして諸君はこの四年間この私の精神に協力し、本学をして物心両面において、日本は固より全世界に誇る理想的総合大学にまで発展せしめる協同努力を続けて来たのであります。その結果はどうでありますか。僅かに三年にして本学は五学部より成るわが国では十数番目に大きな総合大学にまで発展しました。更に来る四月から経済学部及び理学部に大学院を設置する事が認可せられ、ここ両三日中に文部省から認可の公文書が来る事になっていきます。

かくの如く短期間に驚異的發展を遂げた新設大学は文部省始まつて以来空前であるのみならず、世界にも類例がありません。この事は、屢々諸君の眼にも留まつた事と思ひますが、毎月必ず数人は本学を訪れる海外からの大学教授、学者、思想家、文化人が、本学の沿革を聴いて異口同音に一つの奇蹟として驚く事からも裏書せられます。

諸君！ 諸君は私どもと共に本学を創立したのであります。諸君は本学の新天地に入植した最

初のフロンティアー即ち开拓者であります。そして実際私どもは諸君と共に本学をこれ程の大きな総合大学に迄、高度成長させて来たのです。この事実を顧るとき私は諸君に対する感謝の念のため万感胸に迫るものがあります。諸君！ほんとうにありがとうございます。

しかしながら本学は未完成の発展途上の大学です。この段階で最初の开拓者たる諸君は本学を去って行く、これほど私にとって淋しい事はありません。どうか諸君！卒業後も本学を忘れず、先覚者として本学の為に本学の建学精神を継ぎ、本学の発展のために支援して下さい。

さて別な話になりますが、二、三年前でしたか、私が可愛がっている東京大学の或る学生が本学を訪れた事があります。その学生は本学が新設後二年あまりだったので恐らく地方の駅弁大学にも劣る貧弱な大学だと想像して来たのに反して、大学校舎としては格段の豪華さ、未完成ではあるが教育・研究施設の斬新さ、そしてまだまだ数においては少ないけれども教授陣の優秀さに感歎しました。そこでその学生は何も悪口の種がなかったと見えて、東大生共通の思いつたエリート意識から、こんな毒舌を吐きました。

『建物も施設も教授陣も本場に立派ですよ。しかしですね。これでは黄金の籠の中に雀を飼っている様なものじゃないですかね』。そこで私は怒鳴りつけてやりました。『何をぬかす、この馬鹿野郎！成程今は雀かも知れぬ。しかしだ、この雀どもはな、みな鷹や隼や鵬となって籠から

飛び立って行くんだよ。』

諸君！或いは失礼ながら諸君は入学の時には雀であったかも知れない。しかしながら今この卒業式を最後に学窓から広い現実世界に羽ばたきして行く諸君が、今や決して唯の雀でない事を私は信じて疑いません。この事は諸君全員の就職状況が証明するところです。諸君は自分の母校たる本学を愛して来られた。さすれば、諸君が本学を忘れる事なく、機会あれば必ず本学を訪問される事、つまり里帰りをされる事でしょう。その度毎に本学は更に発展し完備しているでしょうが、諸君もまたその都度、決して附和雷同、曲学阿世の青白きインテリではなく、逞しい、或いは孔雀に、或いは鷹に、或は隼に、そして遂には鵬にまで成長したその姿を私のこの眼に見せて貰いたいのであります。

私は本学の建学精神を学生諸君の胸に刻み込む為に私自ら校歌を作詞しました。歌詞は拙劣ですが團伊玖磨氏の作曲は天下の名曲と評価せられております。この校歌を終生恐れず、諸君！絶えず口ずさんで下さい。これが最後に諸君に贈る唯一の言葉です。

最後に御参列のお母様や御父兄の方々に一言御挨拶申し上げます。長い年月に亘って御子弟の教育に御苦労なさいました事と存じますが、本日ここで最高教育機関たる大学を卒業、しかも最後の学校教育を終られました本当におめでとう御座います。心からお祝申し上げますと共に何分にも

未完成の大学の事として多々行とどかなかった点があり、御子息に充分の満足を与え得なかつた事を衷心よりお詫び致します。

第二回卒業式祝辞

昭和四十五年三月二十日

本日は本学第二回目の卒業式です。
皆さん卒業おめでとう。

特にここ三三年来、本学の名声が全国的に高まり、卒業生に対する求人が殺到しその結果、諸君の全員が社会各職域に就職、乃至家業に従事、また更に真理探究の為に進学される事になり、これで諸君の将来一生涯の人生路線の方向づけが確立致しました。重ねて「おめでとう」を申しますと同時に、実社会に出てからは、京都産業大学卒業生として恥かしからぬ、礼儀正しい実直な、しかも闊達豪快、逞しい青年社会人として実績を挙げ、来年度から卒業する後輩たちのために新職域を開拓するフロンティアとなられる事を御願致します。

さて昔から大学の卒業式では総長や学長は、実社会に出てからの心得といった教訓めいた説教

をするのが通例となつてゐる様ですが、私は総長ともあるう者がそれほど不見識な事はないと思つたのです。何故なら、そんな事は在学四年間に各人各様、自己の人格形成として出来上つてゐる筈です。それが一応出来たればこそ卒業生としての資格は有るからです。昨年の卒業式にも同じ事を言つて『そんな説教はナンセンス』と口を滑らせましたところ、場内忽ち大爆笑となりました。後になつて何で笑つたんだらうと自己批判を自分で自分を吊上げて見ましたら、何とナンセンスという言葉は現在ではゲバルト・ゼンガクレンの専用語シユプレヒコールになつてゐる事に気がついて恐縮するやら、自分でも噴き出す始末でありました。

諸君は今日ただ今から本学を巣立ちして実社会に羽ばたきして行くのです。しかもそれが昭和四十五年に!! 昭和四十五年は西暦一九七〇年。昨年中、安保反対、沖繩無条件全面返還、佐藤栄作渡米阻止、大学解体、安田城攻防戦、開放地区バリケード、火炎瓶戦争、市街ゲリラ戦等々と一年中大騒動で、「七〇年危機」が年末のあの総選挙まで連呼されました。「七〇年危機」は日本だけの専売ではありません。マルクーゼとかゲバラの様な妄想世界観やバルチザンのニュー・レフトの行動思想、生活の豊かな先進国のヤング・セネレイションの平和で持て余したバイタル・エネルギーを点火爆発させて世界の現体制を転覆崩壊させれば、廃墟の地球上に理想の桃源境が塵気楼の様に出現するでもあるう様な妄想に駆られて、世界中の身体だけが発達し過ぎて精

神年齢の低い青少年共があげまわつた。それを日本のエコノミック・アニマルのマスコミ報道屋が全世界的「七〇年危機」を連呼した。

しかしながら私自身では七〇年の危機感などは微塵も起らなかつた。あれはどうもマスコミが商売政策で七〇年危機という伝染性精神病原菌を振りまいた為、日本の一般大衆を被害妄想狂者にして仕舞つたようなものですね。実際七〇年になるまでもなく、沖繩は本土並に全面返還される事にニクソン大統領と佐藤さんとの確約が出来たし、安保もそのままにしておけば泰平無事で改定も廃棄もしようと思えば何時でも出来るから別に急ぐ事もなかつたし、総選挙の結果は自民党は絶対多数を取つたのに反して、社会党は惨敗し政局は安定し、あれほど世間に迷惑をかけた大学紛争も下火になつたし、経済パニックも不景気も来ずに経済成長率は世界をリードして当分は続きそうです。さすれば諸君が七〇年危機の本年度に卒業するという事は、大して面白い事でもなさそうですけれども、実はこの一九七〇年に始まつて二十一世紀に至る三十年、即ち三回の十年紀が人類の生活における大変革の時代でありまして、現在の全世界的混乱状態は二十一世紀の人類新文化生産の陣痛の苦しみと解釈すべきであります。即ちその人類生活の文化大革命であります。毛沢東先生の文化大革命とは文句は同じでも意味は全く異なるもの。その人類新文化誕生の陣痛期は、産科医学的処置を誤れば、死産したり母子共に生命を失つかも知れません。そ

ういう意味でこそ本年に始まる七〇年代は危機と言えます。この七〇年代危機の特徴は色々の社会現象が総て非常に急激に変化するという事です。変化は人類社会のあらゆる方面で種々様々な形を取って起るのでありますが、すべての変化に共通の点はその変化が非常に急速であるという事です。この人類社会全般の急速な変化は既に過去の十年、即ち六〇年代から起っておりまして、その先駆者として世界各国を大きく引き離しているのが実はわが日本であります。そしてその急速な変化に即応し対処する、否、寧ろ先を見越して対策を立てなければ国家の発展も繁栄もあり得ません。そしてその点でも日本人は全世界を大きく引き離しております。過去十年間における全世界から奇蹟として驚歎せられたわが国の高度経済成長は、最も代表的な例である。しかし人類の生活、社会状態の変化に即応して既成体制を改革するのになければ成長はありません。経済生活の激変と共に旧体制を廃棄して新体制を打ち建てるフランス大革命に匹敵する産業経済上の大革命を、日本民族は日常茶飯事の如く終戦後ずっと続けて来たという事、つまり過去十年間の連続的産業革命の遂行が、これまた一九六〇年代に日本が世界第三の経済強国となった所以でありましょう。もし人類の生活形態、社会情勢の変化にもかかわらず既成の体制を墨守し続けるならば進歩はあり得ません。沈滞腐敗して遂には好むと好まざるとに拘らず、流血の革命を見る事は必然です。スキ一の発祥地ノールウェイに昔から「スピードは危険を克服する」という格言が

ありますが、危険な場所はスピードによって生命の危難から免がれる事が出来るのと同様に、経済危機に際してはそれに対処してスピーディな技術革命、経営改革を絶えず、それが一かばちかの冒険であろうとも、敢て強行するという事が進歩前進の必要条件であります。この能力が先天的に恵まれているのは世界中で日本民族が第一でしょう。この事は諸君の御存知の未来学の世界的権威ハーマン・カーン博士もそう言っておりますし、最近朝日新聞社から翻訳出版せられたフランスの大新聞ル・モンド社の東京支局長で世界屈指の日本学者ロベール・ギラン博士の著書『第三の強国・日本』を読んでもその事が窺われます。

七〇年代から二十一世紀に向う急速な今一の変化は、全世界の民族国家の国際化であります。即ち現代社会では如何なる民族、如何なる国家も自国だけでは存立する事も繁栄する事も出来ません。地球上の全人類は共存共栄の協同体に向って変化しつつあるという事です。しかし現在のところではその国際化は人類愛によって結ばれた平和な共存共栄の国際化ではなく、政治的には寧ろイデオロギーとナショナリズムとが混がらかつて、世界勢力の分極化、即ち東西の対立、南北の対立と言った政治・経済・文化の対立、更に人類の部族化があつて、局地戦、国内戦、武力革命、クーデター等々、それらの紛争が国際的に波及して日本の内政外交政策にも影響して来ますし、生産経済にしても一国だけで成立するものではなく、例えばイスラエルとアラブ連合と

の局地戦争が米国や英国の石油産業に打撃を与えたりする時代でありまして、また経済貿易の自由化が進みますと経済の自由競争が、経済戦争ともなれば世界の平和攪乱の原因ともなりましよう。

さて一週間前にEXPO70、即ちアジアで最初のしかも史上最大の万国博が開催せられました。そのテーマは「人類の進歩と調和」であります。これは七〇年危機と反対に二十一世紀の人類文化大革命の理想を表徴するものかも知れません。日本の高度経済成長は実に日本国家の急速な発展進歩ではありますが、しかしその進歩に調和が伴っていたでしょうか。調和の取れない進歩は、実は真の進歩ではなくて唯の成長に過ぎますまい。産業の大発展と共に人口の過密・過疎・空気・河川・海浜の水の汚染、工場廃液・農業による人命の危険、交通事故等々の公害は、高度経済成長の歪みであり、その公害防止の対策によって経済成長を調和して、真の人類の進歩があるのであります。大学問題にしても例外ではありません。戦後のわが国の新制大学は経済成長と平行して世界の先頭に立って大成長を遂げましたが、しかしその成長には調和はありませんでした。大学紛争はその成長の歪みであり、いわば教育公害であります。そこで今後の日本民族の課題は、この日本の成長発達に調和を齎し、日本を理想的文化国家、福祉国家として建設し、万国に範を垂れ、世界の平和と人類の幸福の為に貢献する事、この課題に答える事こそが、次の世代

の祖国日本を担って立つ諸君の国民的使命なのであります。

成長と言えば物質的発育の事で経済成長は物質文明です。しかるに調和は精神文化です。ところが現代人類社会では物質文明のみが独走して精神文化は立ち遅れた、否、それどころか頻死の状態です。人類文化の真の進歩のためには、現代人類文化の精神的大革命が必要不可欠でありまして、それが三十年後に迫った二十一世紀の人類の課題なのですが、この課題を果し得る能力も恐らくわれら日本民族でありましよう。この事は諸君の二回生の頃、本学の学事顧問として来朝せられ、諸君に講演せられた英国の大歴史学者アーノルド・トインビー博士も御世辞なしにそう申されましたし、本学の専任教授で教養部でも「教養論」を講義しておられる文化勲章受章者岡澤教授の持論でもあります。

諸君は今、二十一世紀の人類文化の精神的文化大革命の陣痛期の端緒に当る七〇年に本学を卒業して実社会で活躍を始めるのでありますが、諸君が日本の指導者としての重責を負わされるのは正に二十一世紀の初頭、諸君が五十代の働き盛りの年齢になった時です。

本学の建学精神を忘れさえしなければ、諸君は二十一世紀にハーマン・カーンの予言通りに、日本を世界第一の文化的強大国とする一役を買った事が出来るかも知れません。

諸君は過去四年間、天地開闢（あめつちのひらけしとき）以来神々の鎮座ましますと伝えられ

る神山こうやまのその本山ほんざんの神聖なキャンパスにそそり立つ白亜の殿堂で、産業に関連する経済・経営・法学・理学の新知识を学習・研究し、健全な身体を錬え、立派に精神を磨き、次の世の祖国日本を担になつて立つ真の日本人として、人間形成を為し遂とげ天雲あまぐもの向伏むかひすまわ極み、谷蟻たにくぐのさ渡る極きわみ、国の内外を問わず地球上で如何いかなる職域で働らこうともエコノミック・アニマルとなることなく、全人類の幸福と世界の平和に貢献する大乗的だいじょうてき目的で、剛健の意気高らかに天翔あまがける希望のぞみを抱いだいて、五大洲だいごしゅう七つの海に今こそ諸君は雄飛ゆうとびして行こうとしておられる。宇宙の涯はてまでも天翔あまがけるサギタリウスの如く雄大ゆうだい壮麗そうれいな希望のぞみを抱いだき、その実現を夢ゆめる事は諸君のよような青年時代の特権であります。その特権を何時いつまでも放棄せず、遠大な希望のぞみの決意を揺がしてはなりません。如何いかなる難局に当あ面あしようとも不撓ふたふ不屈ふくの精神で自己を棄すててかかれれば、アポロ宇宙船の月着陸さえ実現した時代です、どんなに不可能だと思われた事でも、それが実現した例の方が寧むしろ多いではないでしょうか。

最後に諸君への、今この卒業式に出席しておられる第二期卒業生へのお祝の無形財むけいざいとして、古代ローマ帝国の大思想家プリニウス・パテルの言葉を贈って私の祝辞を終わります。

Quam multa fieri non posse,

priusquam sint facta, judicantur.

意識すれば「それは到底実現不可能だと思われた事で、その実現が成功した事の如何いかに多き」とよ」といった意味です。